

都道府県・指定都市番号	43	都道府県・指定都市名	熊本県	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科名	総合的な探究の時間
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 ～総合的な学習の時間の取組を基盤とし、質の高い探究を通して資質・能力を育成する「総合的な探究の時間」の実現に向けた指導計画や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、学習評価のあり方に関する研究～				
学校名（生徒数）	熊本県立八代高等学校（704人）				
所在地（電話番号）	熊本県八代市永碓町 856（電話 0965-33-4138）				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<a href="https://yatsushirohighschool.com/">https://yatsushirohighschool.com/</a>				
研究のキーワード	①地域、②SDGs、③当事者意識、④組織的指導体制				
研究結果のポイント	○SDGsの視点で物事を分析する学習を通して、生徒たちは物事を多面的・多角的に見ることの重要性に気づくことができた。 ○地域との協働を通して、生徒たちは自らの探究活動の価値を認識し、自己肯定感を高めた。 ○コロナ禍に対応した学習方法を模索する中で、オンラインを活用した学習の可能性を実感することができた。				

1 研究主題等

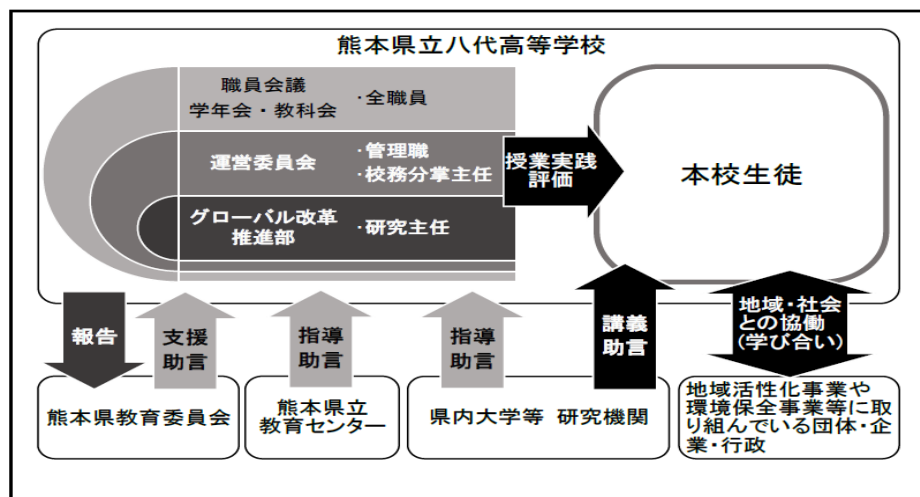
(1) 研究主題

地域と連携した探究活動によってグローバル人材・グローバル人材を育成するカリキュラムの構築～SDGsの達成を目指した地域活動と課題研究を実現させる指導と評価のあり方について～

(2) 研究主題設定の理由

本校では平成28年度よりグローバル人材の育成を学校目標に掲げ、学校改革や教育活動を推進している。その一環として、「総合的な学習の時間」において課題研究や地域活動に取り組んできた。そして、グローバルな課題に今まさに取り組んでいる実践者や地域の課題解決に向けて協働している人々との出会いの中で生徒たちが変容していく様子を目にし、本物に触れることの価値と教育効果を実感した。しかし、この学習活動は学年集団がその時々に応じて模索しながら取り組んできたものであり、教科を超えて学校全体を組織しての取組にはなっていない。また、内容の系統性、教科横断的な取組や指導の方法、評価の方法が確立しておらず、カリキュラムとして未熟である。そのため、指導の方向が明確にならず、生徒の探究の質が生徒のこれまでの学習経験に左右され、また、生徒の意識が変容してもそれを次の段階に発展させることが難しく、生徒の学びが一定の水準を超えないという状況にある。この課題を解決するために、学習の系統性を担保し、組織的な指導体制の構築を図り、指導と評価を充実させる必要がある。また、本校が所在する八代の地域性を考えると、グローバル人材の育成に加えて、グローバルな視点をもって地域の発展に貢献するグローバル人材の育成も推進していく必要がある。以上のような問題意識から研究主題を設定した。

### (3) 研究体制



### (4) 2年間の主な取組

令和2年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○職員アンケートの実施・分析，全体計画の作成</li> <li>○SDGsに関する職員研修〔講師招聘〕</li> <li>○県内大学との連携</li> <li>○地域の団体・企業・行政との連携</li> <li>○取組の分析，全職員による研究経過の共有</li> <li>○地域の方々と高校生との意見交流会</li> <li>○先進校の視察</li> <li>○令和2年度研究指定校事業研究協議会における中間発表</li> </ul>
-------	--

## 2 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 研究内容

- ア 課題への気づきと課題に対する当事者意識の喚起を促すカリキュラム（1年次）の開発
  - (ア) SDGsに関する情報収集と職員研修
  - (イ) SDGsに対する当事者意識を強化する課題探究と地域活動プログラムの開発と実施
  - (ウ) 地域活性化事業や環境保全事業等に取り組んでいる団体や企業や行政との連携
- イ 組織的指導体制の構築と評価システムの確立
  - (ア) 本校の探究活動を通して育成する資質・能力の具体化とその評価方法の開発
  - (イ) 外部機関へカリキュラム実践についての協力の依頼

### (2) 具体的な研究活動

- ア 課題への気づきと課題に対する当事者意識の喚起を促すカリキュラム（1年次）の開発
  - (ア) SDGsに関する情報収集と職員研修
    - 書籍，新聞，国連広報センターの作成した資料や動画，地域の団体・企業・行政の事業や意見等，様々な媒体からSDGsに関する情報を収集し，職員研修や授業に活用した。
    - SDGsの考え方を体験として学ぶために，講師を招聘してワークショップ形式の職員研修を実施した。SDGsの原則を体感したことで，教師がSDGsの重要性を認識するとともに，生徒と社会をつなぐ新たな授業の可能性に気づくことができた。
  - (イ) SDGsに対する当事者意識を強化する課題探究と地域活動プログラムの開発と実施

○「SDGsの視点で物事を見ることによって、地域や世界、自らの生き方、探究活動、教科での学びがつながっていくのではないか」という仮説を立てて、「総合的な探究の時間」（1年次）のカリキュラム開発に取り組んだ。

○単元は、①新しいものの見方を知ることを目指す「SDGsを学ぶ」、②新しいものの見方を活用することを目指す「SDGsで課題発見」、③SDGsを意識して地域と協働しながら取り組む課題研究「コース別プロジェクト」の三つで構成した。様々な媒体を活用すること、地域資源の活用を模索すること、「考えるための技法」を意識することに留意した。

○SDGsの視点で新聞記事を分析する「新聞でSDGs」、SDGsの視点で学問分野を学ぶ「SDGsで学問研究」、SDGsを意識することで自らの身近にある課題と新書の内容を重ねて捉える「新書を読んでレポート作成」等の授業を実施した。

(ウ) 地域活性化事業や環境保全事業等に取り組んでいる団体や企業や行政との連携

○「地域資源を活用することによって、課題意識や当事者意識、主体性、協働性を育むことができるのではないか」という仮説を立てて、「総合的な探究の時間」（1年次）のカリキュラム開発に取り組んだ。

○6月に、研究主任が計画書を持参して地域の団体や企業や行政の担当者を訪問し、協力を依頼した。積極的な協力や提案が多数あり、高校生の活動が地域から強く求められていることを実感する機会となった。

○地域活性化事業や環境保全事業に取り組んでいる方々を講師に迎えて、選択講座「課題発見ライブラリー」を実施した。

○地域の方々の協力により、12コースに分かれて取り組んだ課題研究の中で、フィールドワークや実験、考案商品の試作等の活動を実施することができた。河川の清掃活動や、環境保全に関する高校生と専門家との意見交換会（オンライン）に参加する機会も得た。

○課題研究の中間発表に地域の協力者を招き、「地域の方々と高校生との意見交流会」を開催した。

イ 組織的指導体制の構築と評価システムの確立

(ア) 本校の探究活動によって育成する資質・能力の具体化とその評価方法の開発

○先進校視察を通して、学校改革の経緯と体制、育成する資質・能力の具体化の必要性と手順、改革の理念の共有と課題について情報を得ることができた。

○グローバル改革推進部と教務部とで協議し、資質・能力に関する考え方や必要性についての資料を作成して、理念を全職員で共有し、学習指導委員会や各教科会で検討を始めた。現在、本校で育成したい資質・能力の具体化を目指して、各教科や校務分掌で検討しているところである。

(イ) 外部機関への協力の依頼

○9月に研究主任が計画書を持参して県内大学を訪問し、協力を依頼した。地域と高校生と大学生との協働や、コロナ禍における学習方法の工夫等、具体的な提案をもらった。

○11月に実施した「地域の方々と高校生との意見交流会」や、3月に実施したポスターセッション（課題研究の成果発表会）で、県内大学の研究室と会場とをオンラインでつなぎ、大学教員や大学生から意見や講評をもらった。オンラインを活用することにより学習の機会が広がることを実感し、オンライン活用の可能性を探る機会となった。

### 3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- SDGsの視点で物事を分析する学習を通して、生徒たちは物事を多面的・多角的に見ることの重要性に気づくことができた。生徒たちのワークシートや振り返りの中に、「今まで～知らなかった」「～を初めて知った」「～を知って、～と考えるようになった」「～と～がつながっていることに気づいた」という表現が散見された。このことは、学習を通して物事の新たな一面が見えてきたことや、物事を多面的・多角的に見ることの大切さに気づいたことを示していると考えられる。
- 地域の方々との協働を通して、生徒たちは自らの探究活動の価値を認識し、自己肯定感を高めた。地域の方々からは、具体的な助言や激励、研究の継続と深化への期待が寄せられた。生徒たちのワークシートや振り返りの中には、「高校生にもできることがある」「知ることで行動が変わる」「高校生と地域の大人が協力して八代の未来をつくっていくことがすごい」「地域にすごい人たちがいることを知った」「とても親切に対応してもらって嬉しかった」といった言葉が多数見られた。
- コロナ禍に対応した学習方法を模索する中で、オンラインを活用した学習の可能性を実感することができた。「総合的な探究の時間」で遠隔地と本校をオンラインでつなぐことを試みたことを契機にして、講演会や大学生との意見交流会、学年集会やLHR等、オンラインを活用した取組への挑戦が増えた。
- 4月当初に、職員アンケートを基に、本校で育てたい生徒像、育成したい資質・能力を示した。学校内での組織的指導体制の土台作りとして、各種校務分掌、校内委員会と連携しながら、理念を全職員で共有し、現在、各教科等で、資質・能力育成の系統化等について検討している。
- 「総合的な探究の時間」を更に学校全体の取組として推進していくために、4月に示した本校で育成したい資質・能力を、教科を超えて育成していくことが急務である。また、それを踏まえ評価方法を検討していく必要がある。
- 地域の団体・企業・行政と継続的に協働していくための体制を整える必要がある。
- 1年次の学習活動を通して芽生えた課題意識を2年次の学習活動へとつなげていく工夫が必要である。

### 4 今後の取組

- ア 課題探究活動を深化させるカリキュラム（2年次）の開発
  - （ア）他校の取組に関する情報収集と先進校視察
  - （イ）SDGsを意識した個人研究テーマの設定を支援するワークショップの開発と実施
  - （ウ）地域の協力者との連携深化
  - （エ）県内大学等との連携深化
- イ 組織的指導体制の構築と評価システムの確立
  - （ア）本校の探究活動によって育成する資質・能力の具体化とその評価方法の開発
  - （イ）評価規準の整理・運用
  - （ウ）指導と評価に関する職員研修の充実
  - （エ）メタ認知を促し学びの成果を次の学びに生かす自己評価の方法の開発と実施
  - （オ）生徒や学校の状況に応じて発展的に変革する持続可能な指導体制の構築